是成　太一（財団法人飯田攪隠遺徳顕彰会）

一〇、疫痢について　安井　宏（愛知県）

一一、三廼俊一先生の黒川良安伝　寺畑　喜朔（金沢医大）

一二、上州原沢文仲文書中にみられた坪井塾門人録断簡　蒲原　宏（新潟市）

一三、ボードイン指導：慶応元年長崎病院の入院カルテ（9症例）　石田　純郎（三菱水島病院）

一四、横浜仏語伝習所、太田陣屋、修文館の相互関係について　中西　淳朗（横浜市）

一五、日本の近代麻酔学の発展を顧みる　藤田　俊夫（京都市）

一六、男子生殖巣をあらわす語の歴史的変遷：とくに睾丸（えきがん）と睾丸（こうがん）の混同について　友吉　唯夫（滋賀医大泌尿器科）

一七、吉田顕三のこと（第5報）——中野操先生に捧ぐ　丸山　博（箕面市）

〔書　評〕

鈴木明子著『日本における　作業療法教育の歴史』

この本の標題だけ見ると随分特殊な狭い範囲を扱ったものの様な印象を受けるかも知れないが、決してそうではない。著者の略歴を紹介すると、先ず北海道大学教育学部を卒業し、その後アメリカ、コロンビア大学医学部に学んで作業療法士（OT）となり、帰国後日本で最初の OT として公認された。それは「理学療法士及び作業療法士法」（昭和四〇年）が制定される以前であった。以後日本の OT 教育を推進して来られたが、最近再度アメリカへ留学し、ミシガン州立ウェイン大学大学院で学位論文を書いて Ph. D. となった。その際の論文を基としてできたのがこの本である。これは作業療法教育の狭い技術論を述べるのではなく、まさに Ph. D. の学位にふさわしく、作業療法の哲学的基盤を探って、日本と欧米の思想的背景の差異まで掘り下げて考察を加えている。

本書の冒頭の文章で表紙カバーにも印刷されている次の一節を読めば、著者の訴えようとする事が大体推察できるであろう。

「作業療法は、より健全な心と身体を求める人間の自然な欲求、希望と努力の現れたものである。古代ギリシャから今日まで続いて来た理念であり治療方法である。人権尊重の高まりが大きな波として一国、一地方を包むとき、作業療法が表面化して突出した先駆者の業績が浮び上がるのである。この人々の努力はどこか別の国に飛び火し、次の先駆者の心を燃やして歴史の流れの中でつながって来たのである。」

しかしながら人権の観念も単純ではない。西洋では古代ギリシャ以来の民主主義と個人主義が思想の基盤にあるが、国全体が同族体制の中に閉じ込められて来たような日本では個人主義や人権思想の育つ土壌が乏しかった。第二次大戦の敗戦後に他動的にそういう考え方や制度が導入された面が多いが、日本人の中にも先駆者がいたことは忘れられてはならない。作業療法に限らず、リハビリテーション医療あるいは広く言って日本の医学医療全体が技術論に傾きがちであるのはよく指摘される所であるが、それに対する反省の一資料として本書は読まれて良いのではないかと思う。

著者がもう一つ強調していることは理学療法と作業療法の違いである。日本ではこれらが法律上では同時に誕生し、PT と OT は同類の様に思われているが、両者は歴史的発生や思想的背景が違うということである。日本では OT が作業療法と訳されているが、OT は言うまでもなく英語のオキュペーショナルセラピーの頭文字であり、作業療法よりもう少し広い含意を持っている。理学療法は文字通り理学的身体的方面からのアプローチという性格を持っているが、OT はより精神的心理的方面からアプローチして来たという歴史的背景がある。アメリカのデューイの教育哲学の影響等も入っている。著者が教育学から出発して OT になった所以である。なお蛇足ながら、T はセラピーの意味とセラピストの意味と両方に使われる。

その他当然ながら、OT 教育史についての具体的資料も豊富で参考になる。リハビリテーション関係者あるいは日本の医療について考えようとする人に一読をお奨めしたい。

（北海道大学図書刊行会、一九八六年刊　定価　四千円）

（中村　昭）